

SONIC CITY

2026 SERIES

2:00pm, May 30th (SAT),

2026

155

ソニックシティ 2026シリーズ 第155回さいたま定期演奏会
2026年5月30日(土) 午後2時開演 / ソニックシティ 大ホール

第155回さいたま定期演奏会 日本フィルハーモニー交響楽団

メンデルスゾーン

序曲《フィンガルの洞窟》op.26 (約12分)

Felix MENDELSSOHN: Overture "The Hebrides" op.26

ライネッケ

フルート協奏曲 ニ長調 op.283 (約23分)

Carl REINECKE: Concerto for Flute and Orchestra in D-major, op.283

～休憩(20分)～

ベートーヴェン

交響曲第6番《田園》へ長調 op.68 (約44分)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.6 "Pastorale" in F-major, op.68

指揮：鈴木 優人

Conductor: SUZUKI Masato

フルート：Cocomi

Flute: Cocomi

コンサートマスター：田野倉 雅秋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Solo Concertmaster

オーケストラ：日本フィルハーモニー交響楽団

Orchestra: Japan Philharmonic Orchestra(JPO)

主催

公益財団法人埼玉県産業文化センター / さいたま市 / 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援

埼玉県 / 埼玉県教育委員会 / さいたま市教育委員会 / 埼玉県吹奏楽連盟

協賛

株式会社タムロン

表紙作品提供

埼玉県立新座総合技術高等学校デザイン専攻科 赤間 珠那

作品名「音画」

作者コメント「主に音の響きや交わりをイメージしました。それらは目に見えないものですが、曲目によって変わる楽器の音色が絵画を連想させたので筆と絵具を使って描いたような作品に仕上げました。」

【アンケートのお願い】今後のソニックシティ主催公演参考のため、アンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにお答えいただきました方から抽選で3名様に本日の出演者鈴木優人氏とCocomi氏のサイン色紙をお送りいたします。右の二次元コードより、スマートフォン・タブレットからお答えください。(所要時間約5分)



▶本公演は最終楽曲が終了し、指揮棒が下りて以降は写真撮影が可能です(アンコールは除く)。撮影はスマートフォン・携帯電話をご使用いただき、自席にてご着席のままお願い致します。撮影時は周りのお客様へご配慮いただきますようお願い致します。



©Marco Borggreve

指揮：鈴木 優人

バッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) 首席指揮者、関西フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者、アンサンブル・ジェネシス音楽監督。読売日本交響楽団指揮者／クリエイティブ・パートナーを2026年まで6年間務める。NHK交響楽団等と共演するほか、海外ではドイツ・ハンブルク交響楽団、オランダ・バッハ協会等に客演。2025年のBCJヨーロッパ公演にて自身の補筆校訂によるモーツァルト《レクイエム》をパリ、マドリッドなど7都市で指揮。11月にはパリ管弦楽団と初共演を行い、現地で好評を博した。Bunkamura Produceのモーツァルト・オペラシリーズでは、26年2月に《フィガロの結婚》

(美術：隈研吾) にBCJとともに上演、高い評価を得た。NHK-FM「古楽の楽しみ」などメディア出演も多い。第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞、第18回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第18回ホテルオークラ音楽賞、第29回渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。調布国際音楽祭エグゼクティブ・プロデューサー。九州大学客員教授、神戸松蔭大学客員教授。

X / @eugenesusuzuki

Facebook & Instagram / masatosuzukimusic



©Akinori Ito

フルート：Cocomi

3歳からヴァイオリン、11歳よりフルートを始め、アシュケナージ、エマニュエル・パユのマスタークラスを修了。国内コンクールで多数受賞。2021年よりソリストとして活動を開始し、ニューヨークのラジオシティ・ミュージックホールで行われたラン・ランの公演などに出演。2022年にデビューアルバム『de l'amour』を発表。以降『Mélancolie』『Neos』を経て、2025年8月に最新作『Bouquet de Cinéma』をリリース。

生 ~生命の躍動 人生への感謝~

メンデルスゾーン 序曲《フィンガルの洞窟》op.26

19世紀前半、作曲に指揮にその才能を発揮し、当時のドイツ音楽界の担い手となったメンデルスゾーン (1809-47)。だが彼の体内には、ヨーロッパで長年差別的とされてきたユダヤ人の血が色濃く流れていた。

そんなメンデルスゾーンは、1829年に人生初めてのイギリス訪問を果たす。ヨーロッパワイドな活躍をおこなうための地歩固めとともに、自らの見聞を広め教養を高める目的があった。

その旅の最中、スコットランドのヘブリディーズ諸島へ嵐の日に赴き、彼の地にあるフィンガルの洞窟を訪ねた経験を基に1830年に作曲、1832年に改訂されたのが、演奏会用序曲『フィンガルの洞窟』。「演奏会用序曲」とは、オペラや劇の幕開けに奏でられる一般的な序曲とは異なり、演奏会での上演を念頭に置いた短めのオーケストラ曲のことを指す。

作品そのものは、ドイツ音楽の象徴ともいえるソナタ形式で書かれている。とはいえ、ソナタ形式につきものの堅固な構築性というよりも、メンデルスゾーンの内面に映し出されたヘブリディーズ諸島の寂しさ、儚さを宿した幻想的なテーマが、時に壮絶に襲い掛かる嵐の中に明滅してゆく。

ライネッケ フルート協奏曲 二長調 op.283

「フルート協奏曲」というジャンルは、18世紀以前、王侯貴族の司る宮廷における音楽の世界で、人気のジャンルだった。優美で繊細な宮廷にぴったり、というのがその理由。

それが19世紀、つまり市民の時代になると、この時代のトレンドだった「進歩進化」の動きに呼応するかのようになり、フルートも木製だったところが金属製になったり、幅広い音域や大幅なダイナミクスを出せたりするような改良が重ねられていった。結果、フルート協奏曲は、フルート奏者が自身の腕前を披露するべく、彼らによって作曲されることが多くなっていった。

そうした中、名の知れた作曲家による珍しいフルート協奏曲が、1909年にライネッケ (1824-1910) が作曲した作品だ。ライネッケは、かつてメンデルスゾーンも活躍したドイツ東部のライプツィヒを拠点に、指揮者、教育者、作曲家として活躍。ドイツ音楽の伝統を重んじながら、ロマン性と堅固さの両者をも具えた様々なジャンルの曲を手掛け、生前はつとに有名だった。

この協奏曲も、既に西洋音楽における調性やリズムの破壊が試みられていた20世紀初頭において、あえてそれに背を向けるかのようにロマンティックな要素を湛えている。だがその一方で、オーケストラと独奏フルートの織り成す意外な音色の組み合わせや、はっとするような調性の用い方も時折出現する、フルート協奏曲の佳作となっている。

ベートーヴェン 交響曲第6番《田園》へ長調 op.68

ライネッケはもとより、メンデルスゾーンも、自分らの偉大な先達として仰いでいたベートーヴェン (1770-1827)。1807年から08年にかけて、彼が『交響曲第5番』(いわゆる「運命」)に取り組んでいたのと同じ時期に作られたのが、当作品である。

なおこの交響曲の副題、日本語では「田園」と訳されるが、原題は“Pastorale”となる。そして“Pastorale”とは、古代ギリシアでは「牧歌劇」、キリスト教においてはイエスの「降誕劇」をも意味していた。荒野で羊の番をしていた牧人たちが、貧しい馬小屋で生まれたイエスを拝みに来る場面に登場する、6/8拍子に基づく温かく安らぎに満ちた音楽である。

このPastoraleと呼ばれる音楽が、当作品の第5楽章にも登場する。ベートーヴェン自身によって「牧人たちの歌一嵐の後の喜ばしく感謝に満ちた感情」という標題が書き込まれ、Pastoraleの特徴である6/8拍子の穏やかな楽想が基本だ。

実のところベートーヴェンの交響曲第6番は、単なる田園生活を描いた以上の意味合いを持っている。たとえば、第1楽章の標題「田舎に到着した時の快活な感覚の目覚め」。これは内面描写であって、「自分が何を感じるか」という問題意識に基づくもの。第2楽章の「小川的情景」も、絵画的描写の要素が目立つものの、自然の風景を自らの中で咀嚼し表現するという、ベートーヴェン個人の意識や人生観が顕著に投影されている。

そんな2つの楽章に続いて登場するのが第3・4・5楽章であり、続けて演奏される。しかもそこ

には、暗から明へという流れが明確に現れている。第3楽章の束の間の〈明〉＝「田舎の人々の愉快な集い」が、第4楽章の〈暗〉＝「夕立と嵐」によって破壊された後、件の第5楽章つまりは究極の救いとしての〈明〉が訪れる、という構成だ。

救世主による人類救済の象徴であるPastoraleは、こうしてベートーヴェンを通じ、人間一人一人が自らの生をかけ、救いを求めて立ち上がるPastoraleへと変容を遂げたのである。

曲目解説：小宮正安

ダンスと音楽

ソニックシティではこれまで多くのダンスイベントを開催しています。

そこで2026年の日本フィルさいたま定期演奏会シリーズでは、「ダンスと音楽」をテーマにコラムをお届けします。

ベートーヴェンとスケルツォ



『農民の踊り』 P.ブリュウゲル父 1568年

ベートーヴェンといえば、演奏会における出囃子的な存在だった交響曲を、オーケストラの壮大な響きを通じ、人間の生きるべき道や姿勢を説くジャンルへと変化させた、典型的存在である。本日の演奏会で取り上げられる「交響曲第6番《田園》」も、その代表的な一例だ。

しかもベートーヴェンの場合、元々交響曲の中間楽章にしばしば採り入れられていた「メヌエット」の代わりに、「スケルツォ」を導入したことで有名な。《田園》でいえば、農民の踊りを彷彿させる第3楽章が、「スケルツォ」にあたる。

「メヌエット」も「スケルツォ」も、三拍子を基本としていることには変わらない。ただしメヌエットは元々、貴族の宮廷で踊られる優雅な踊りのことであり、それが大人気を博していたため、元々宮廷で催されることがほとんどだったオーケストラ演奏会にも登場するようになった。

だがベートーヴェンが活躍した18世紀末から19世紀初頭にかけては、そんな状況が大きく変化を遂げてゆく。つまり、革命等により貴族の力が揺らぎ、彼らの支配下に置かれていた市民が力を持ち始める。そして彼らは、それまで貴族に独占されてきたオーケストラ演奏会をも含む様々な文化を、自分たちのものにしようとした。

ただし市民たちは、貴族の文化をそっくりそのまま真似たいわけではなく、それらを自分たちに共感のできるようなスタイルに作り替えた。交響曲が、人生を投影させた内容に変化していったのもその一例。またそうした中で奏でられる三拍子の楽章は、特権階級による長年の支配を跳ね返すかのような、下々の荒ぶる踊りを彷彿させる、急速なものとなった。

なお「スケルツォ」とは、イタリア語で「冗談」という意味。優美な宮殿でのほほんくらす支配者からすれば、悪い冗談のように聞こえかねない庶民の踊りの音楽が、実のところ旧来の社会をひっくり返すような、途方もないエネルギーを湛えていた。つまりスケルツォとは、実のところ冗談ではない、それこそ革命にも通じる音楽だったのである。

文章：小宮正安

第155回さいたま定期演奏会に寄せて

この度は第155回さいたま定期演奏会の開催を心よりお慶び申し上げます。

今回、ステージ左側には樹齢約80年の山もみじをご用意いたしました。秋の紅葉に注目が集まるもみじですが、新緑もまた一味違った風情がございます。本作は、複数の木を密着させ、株立ち樹形に仕立てております。時間をかけて職人によって作出された幹枝の曲線は、優しい風が通り抜けるかのようにございます。

右側には、樹齢約50年の唐楓(トウカエデ)の盆栽をご用意いたしました。中国から伝来し、切れ込みの入った葉の形を蛙の手に見立てたことによりその名がつけました。絶妙な位置にそれぞれの木を配し、非常に薄い鉢に収めることで、まるで林の中を歩いているかのような景色を感じていただけます。

オーケストラの演奏と、盆栽の調和をお楽しみいただけましたら幸いです。

盆栽清香園 山田寅幸



TAMRON

Focus on the Future

監視カメラ用レンズ
街の「安全・安心」を見守ります



医療用レンズ
「内視鏡手術」を光学で支えます



光学の力で、 社会を良くしていきます

私たちは「感動」と「安心」を届ける、総合光学メーカーです。

タムロンレンズは、大切な思い出を写真に残し、
日常生活の平和を見守り、「自動運転」の実現に寄与し、
内視鏡光学系で医療に貢献しています。

ミラーレスカメラ用交換レンズ
かけがえない美しさを撮ります



車載カメラ用レンズ
「自動運転」の確かな目となります



主な取扱い製品

ミラーレスカメラ用交換レンズ、一眼レフカメラ用交換レンズ、監視カメラ用レンズ、FA/マシンビジョン用レンズ、TV会議用レンズ、カメラモジュール、車載カメラ用レンズ、ビデオカメラ用レンズ、デジタルカメラ用レンズ、ドローン用レンズ、医療用レンズ、各種光学用デバイス部品 他



株式会社タムロン

〒337-8556 埼玉県さいたま市見沼区連沼1385番地
<https://www.tamron.com/jp/>